

## 小規模作業所の設立と運営に関する研究(Ⅰ)

—知的障害者を中心とした小規模作業所「あさひのあたる家」の設立過程に関する分析—

石 山 貴 章

本研究は、知的障害者を中心として独自の歩みが続けている小規模作業所「あさひのあたる家」について、その設立に至るまでの背景と実際の活動を分析し、制度的、財政的なバックアップの少ない作業所が、どのようにして立ち上がり、維持、運営されているのかというひとつの道標を提示する試みを行った。その結果、作業所設立の動機づけとして、【保護者の願い】【卒業生の行き場のなさ】【解雇・リストラの対応】【中継地点】【会社側のプレッシャー】【ヒューマニズム】【先導者の存在】が明らかとなった。ここで提示した結果が、今後、新しく作業所などを立ち上げようとする関係者にとってのひとつの資料になればと考える。今後も、継続したフィールドワークの中から、作業所の維持・運営に必要な取り組みと新たな作業内容、人的・物的支援体制や市場開拓の検討を行っていきたい。

キーワード：小規模作業所、地域資源、つながり、市場価値

Establishment and management of a small workplace (1)

*Asahi no ataru ie*, a house in the morning sun, for intellectual disabilities people

Takaaki Ishiyama

The establishment and activities of a small workplace named *Asahi no ataru ie*, a unique home intended mainly for intellectual disabilities people, which was built with little infrastructural or economic support was analyzed. The results indicated that motives for establishing the workplace were “parents desire”, “school graduates needed a place to go to,” “coping with discharge or retrenchment,” “a transit point,” “pressure from the company,” “humanism,” and “the existence of a leader”. It is suggested that these findings provide helpful hints for establishing similar workplaces. Continuous field investigations in the future would be focused on the management and the upkeep of the workplace, the need for support systems and market development of the project.

Key words: small workplace, local resources, relationship, market value

## 1 問題と目的

特別支援学校卒業後の障害児者の進路確保や保障の問題については課題が多く、就職を希望している子どもたちや親の願いなどを実現していくことに大きな壁が存在している。また、いったんは就職したにもかかわらず、何らかの事情により、会社を退職、リストラされている卒業生も後を絶たず、再就職の道も厳しい状況下で、いかに、この子どもたちの生活や労働を保障していくのかについての十分な検討と具体的手立てが必要とされている。

杉山・高橋（1994）らは、就労に挫折した自閉症青年の臨床的検討を行い、離職後の青年たちの動向に課題を見出している。できるだけ早期に、再就職や施設、作業所などへの進路変更を目指すべく社会復帰に向けてのサポートの必要性が求められている。宇川・柳本・矢野川・土居・前田・田中・石山（2007）らは、農業福祉のあり方について、小規模作業所の維持と継続を検討し、利用者の生活を豊かにしていくためにも、小規模作業所という機動力を生かした取り組みは欠かせないものであるとし、これを取り巻く物的・人的環境の障壁を除くためには、支援者・利用者が共に動くことによって、周りを取り込んでいこうとする強い姿勢が必要であるとしている。

行き場を失った卒業生にとって、再チャレンジしていく場所は必要であり、質・量ともに豊かな場の存在が求められている。しかし、現状は、このような場が限られており、生活・労働の保障がなされていない家族や本人が多数存在している。一方、小倉（2003）は、経営者の視点から現在の福祉のあり方を批判し、特に福祉という理念や制度に依存しすぎている体制や考え方そのものが、利用者の生活や労働の保障を制限しているとした。

この小倉の提言は、これまでの施設や作業所を含めた障害者支援の現場に大きな問題提起を行っており、各々の施設や作業所の利点、特色を打ち出しながら、福祉の枠内だけで活動をとどめることなく、一般社会に対して、より主体的に関わっていく、挑戦していくことの重要性を指摘している。福祉や教育に携わる者に対して、学校や施設、作業所がもっている力を最大限に生かし、創り出している製品や人間の「市場価値」（小倉：2003）を高めて、地域や社会にチャレンジしていく取り組みの必要性を求めていると考えられる。

また、二宮（2005）は、発達保障労働と教育・福祉労働に焦点をあて、発達の社会的保障と人間の発達を保障する労働について言及した。その役割を果たすものとして「コミュニケーション労働」を鍵概念として浮上させながら、人が物や他者に働きかけて、さまざまな製品を生み出していく営みを継続していくことにより、「物質代謝労働」と「精神代謝労働」が活性化し、人間発達の場を作り出していくと考えた。まずは、労働の場を生み出すことが必要であり、自然に人や物がそこに集結してくるきっかけづくりが求められよう。二宮の考えるコミュニケーション労働の出発点を創り出していくことにより、そこから相互理解や信頼感、同じ目的に向かって歩む仲間意識が育まれ、最終的に、労働を通しての人間発達の促進につながっていくと考えられる。

よって、本研究では、地域に深く根ざした農業福祉活動に取り組み、「労働の保障」「地域資源の掘り起こしと活用」「人との関係性」を軸として活動している小規模作業所「あさひのあたる家」の設立過程と運営について、継続したフィールドワークを通しながら分析を試み、作業所設立に至るまでの活動を掘り起こすことを通して、社会性の強い、そして人と物との「市場価値」を見据えた試みを行う小規模作業所の成り立ちを捉えていくことと、今後、小規模作業所を立ち上げていくために必要な視点や具体的な取り組み、活動の意義を明らかにしていくことを目的とした。

\*小規模作業所とは、障害のある人たちが毎日通える範囲（地域）内にあり、地方自治体や家族の会、あるいは各種の民間団体やNPO法人などによって運営されていることが多い「福祉的就労」の一形態である。2000年の社会福祉事業法改正により、施設の事業規模や資産要件などが緩和され、小規模通所授産施設として社会福祉法人格を取ることも可能となった。

## 2 方 法

フィールドワーク調査を中心にしながら、現場で共に活動を行うことによって得られた記録などをもとに分析を行った。また、フィールドノートや進路指導記録表の検討、支援者、保護者、関係者、当事者などのインタビュー記録に基づいて、作業所設立に至るまでの動機や背景知についての主な要因を掘り起こしていった。

## 3 結果と考察

作業所設立前と初期の取り組みについて、長期のフィールドワークで得られた知見とフィールドノート、インタビュー記録などを総括したかたちで結果の提示と考察を行った。特に、作業所設立の動機づけや背景知に関しては、「保護者」、「利用者」、「学校」、「会社」の4点に焦点を絞りながら探っていった。また設立前後の重要な取り組みを時系列にまとめ、具体的、実的な設立に至る過程を述べた。

### 3.1 作業所設立の動機づけ

保護者の「わが子の学校卒業後の行き先を何とか確保したい」という強い願い、卒業生の進路先確保の困難性や会社を解雇、リストラされた卒業生に対するケア、第二の生活・労働ステージの必要性などが、作業所設立の根本に存在している。一方、長年、卒業生の就職で関わっている企業からも、学校や大学などで卒業生の受け入れ先を作ることはできないのかという厳しい言葉も引き金にはなっている。

#### Case 1 保護者の方々

- ① 先生、うちの子は、施設にも入れんし、もちろん就職もできん。けど、養護学校でやってもらったように、毎日、作業をして、おなかをすかせて帰ってくるという人間としてのあたりまえの生活を何とかさせちゃりたいがよ。
- ② 作業所は作ってもらいたいけど、私は仕事もあるき、なかなか一緒に作業したり、手伝うことはようせん。そこがちょっと気が引ける…。
- ③ 作業所を作っても、本当に続けてやっていけるがやろうか？ 私らあも、できることはするが、やっぱり、この子らあを、まとめて面倒みてくれる保護者以外の指導者がいると思う。私らあではなかなかようせん。
- ④ あのお母さんと一緒にするがは抵抗がある。気の合う者どうしでやりたいがやけど…。

保護者は、常にわが子の卒業後の姿を意識しており、厳しい状況といわれる社会の中で、自分の子どもの行き場は本当にあるのかという不安と闘い続けている。一方、作業所ができるとありがたいが、その反面、自分は深く関与できないという葛藤で悩んでいる。作業所を立ち上げるにあたっては、事前の準備がかなり必要であり、子どもたちの作業確保に関しても、継続して働くことができるだけの場所と内容が必要となってくる。もちろん、労働に見合う賃金の保証も必要であるため、物を作るだけでなく、その販売、流通経路に至るまでをも確保していかななくてはならない。作業所はほしいけど、素人集団で、本当に運営、維持していくことができるのかという不安と、やはり、出来ることなら、誰かにリーダーになってやってほしいという第三者的な視点は作業所設立の話が進むにつれて、強くなってきている。また、利用者を中心に活動していくという目的ではあるが、保護者同士の関係性やしがらみが作業所立ち上げにかなり影響を及ぼしていた。設立が具体化されるにしたがって、このような問題が大きくクローズアップされていくことになった。

### Case 2 利用者本人たち

- ① 毎日家でおるがはいやや。みんなあと一緒に作業してお金をもらいたい。
- ② 作業所の給料はいつ？いくらもらえる？休みはいつ？
- ③ 会社は厳しかったき、もう戻りとうない。怒られるがはもうえい…。
- ④ ぼくはこんなところで作業するより、やっぱりあの会社で働きたいがや。
- ⑤ 毎日、暑い中、いっつも草を引くがはたまらん。どっか会社を見つけてや。
- ⑥ 先生、やっぱりみんなあと一緒におる方が気が楽なで。
- ⑦ ちょっとしんどいけんど畑で仕事するほうがぼくにはおうちゅうと思う。

最初は、会社に勤めていたという自負やプライドがあり、なかなか、自分の現状や作業所の活動に対して受け入れることができない利用者もいた。「給料はどのくらい」、「休みはいつ」、「いっつも畑仕事ばかりで嫌や」などの話も聞かれた。一方、「もう、あんな会社に帰りたくない」「作業所の方が気楽だ」というコメントから分かるように、これまで精一杯、仕事をしてきた本人が、実は我慢していた、耐え続けていたさまざまな状況があることが理解できる。利用者にとっての作業所は、心や身体の受け皿でもあり、ここは、ひとつの中間基地、新たな生活に向けての充電場所としての価値も見出される。また、「やっぱり会社で働きたい」という利用者については、作業所の活動と並行して、再就職の場を求めていく活動も行わなくてはならないことも示唆されている。

### Case 3 学校の先生方

- ① 場合によっては、土曜も日曜もつぶして準備せないかんなる。また、これから、どれだけの人が協力してやってくれるかもわからん。今は、有志でやりゆうけんど、それでも準備が追いついてない。
- ② 作業所が出来た時の責任者と指導者の問題も頭が痛い。こんな小さい作業所の責任者と指導を誰がやってくれるがやろう…？
- ③ お母ちゃんたちも、わが子やったら、「私たちがやる」という気概を少しは見せてほしい

なあ。結局、誰かに頼りたい、面倒見てもらいたいというもんが多い。

- ④ 学校の教員がそこまでやる必要性があるのか？作業所の設立に協力したいと思いう先生はたくさんおるけど、それぞれに生活もあり、家庭もある。何か、積極的に関わりたい先生だけが、保護者にとって「いい先生」みたいな…。
- ⑤ 学校としてどこまで協力するのか…という線引きをしっかりとつけちよかないかん。

学校教員も、作業所の必要性は以前から感じていた。にもかかわらず、設立までに至らなかった背景には、上記のコメントにもあるように、先頭になって動いてくれる人材の問題であった。学校教員が兼任して行うことは難しいので、あくまで、サポート側に回るしかない。複数名の卒業生たちを引き受けて毎日作業に従事するためには、どうしても指導者の存在が必要であった。一方、作業所の設立をめぐるでも、教員内、学校内において数多くの意見が交わされた。教員同士の軋轢も生じた。「出来る範囲で関わることでいい」という外面的な部分と、「あの先生は何もやってくれない」という暗黙の批判が現在でも続いている。また、教員が前面に立ってリードしていくと、保護者が全面的に依存してしまっ、言われるがままに動くことのみで終始してしまうという負の側面も見られた。学校としては、あくまで保護者が主体となって立ち上げ、運営していくというねらいをもっていたので、保護者と協働しながらも、徐々に、活動の中心に保護者が位置してもらうためにはどのような働きかけが必要であるかを常に探っていた。

#### Case 4 企業の方々

- ① もう、うちの会社でも、おまんくの学校の生徒を何人も雇うてきちゅう。これ以上はなかなか無理ぜ。先生らあは、俺らあにあたま下げてお願いにくるけど、逆に、俺らあが、あたま下げるき、先生が、この子らあを引き取ってや…。
- ② 学校が会社を作って子どもを雇ったらええじゃんか？そんなことは出来んがかえ？
- ③ 先生らあは、人に頼むばかりで、自分らあでは、何もやろうとはせんじゃないか
- ④ すまんが、うちのところでは、もうこの子の面倒はみれん。うち以外のところでは、この子も年やき、なかなか雇ってもくれんろう…。それは俺もわかちゅうけど…。学校でこの子の面倒はみれんのかえ？
- ⑤ 会社に預けっぱなしじゃいかんぜ。卒業させたら先生らあは終わりやろうけど。

上記のような話はひとつの会社だけではなかった。学校は会社を作れないのか、大学では雇用してもらえないのか、役所や行政はどうしているのか、など、厳しい命題が突きつけられた。確かに、支援者側は、会社に大きく期待、依存している側面があり、何とかしてくれるのではないかという思いが存在している。しかし、会社側も精一杯の状態維持、経営がなされており、「私たちばかりを頼ってもらっても困る」という暗黙の思いが強く感じられた。「学校で面倒を見ることができないのか？」という素朴な質問は、「卒業させたら終わり」なのかという疑問につながっており、さらに「学校は気楽でいいね」という批判となっている。「こちらが逆にあたまを下げるから、先生お願いします」というコメントは、特に私たち支援者に対しての熱意と力のなさを突かれた思いであった。

### 3.2 活動拠点の確保

これまで卒業生の就職で関わってきた地元企業社長の協力により、河川敷にある土地を無償で借り受けることができた。約100坪あまりの敷地であり、保護者や特別支援学校教員のボランティア作業により、草刈りからスタートをしている。膨大な量の草が生い茂っており、毎日のように、保護者の手が空いた時間帯や教員が勤務終了後、日没までの僅かな時間を利用して作業を進めていった。また、週末には、休みを返上して、父親が草刈機を持参して活動した。さらに、特別支援学校の現場実習を利用して、高等部生徒とともに、実習期間中の作業としても草刈りに取り組んできた。約3ヶ月後には、草の処理も終わり、その後、畑として活用していくために、耕しを行ったり、肥料を入れたりする活動を行ってきた。河川敷にあるため、大雨や台風のたびに浸水することも予想されたが、とにかく、活動場所の確保のために、借り受けた土地の整備を行った。今まで何の手入れもされてこなかった土地に多くの人が入り出すため、河川敷で畑や田を作っていた地元の人たちからも着目されるようになり、刈った草の処分方法や、水の確保など、その土地の人々からも少しずつ支援が得られるようになってきた。

### 3.3 指導者の確保

作業所を運営、維持していくためには、指導者の養成と確保が必要となり、地元大学を卒業予定の青年を雇用することとなった。この青年は、大学で特別支援教育を学んでおり、専門性と実践力を兼ね備えていたので、すぐに作業所の目的や活動の流れを把握し、細かな指示内容についても、保護者や特別支援学校教員たちのアドバイスを受けながら、作業所設立活動に携わってもらった。本人は、将来的に特別支援学校教員を目指しており、そのために必要とされる採用試験の勉強時間確保については配慮していかななくてはならなかった。長期間、継続して指導者としてやってほしいという気持ちもあったが、本人の将来を考えた場合、小規模作業所という不安定な職業にいつまでも留めておく必然性や理由が見出せなかった。

### 3.4 小規模作業所の利用者

最初の利用者となったのは、2002年に卒業したりょうじさんであった。卒業後、いったんは食品製造会社に就職したものの、さまざまな理由が重なってわずか2ヶ月で解雇となった。再就職も検討をしたが、保護者の考えと願い、本人の状態を考慮し、作業所の利用者第1号となった。同時に、母親も作業所の設立と運営に深く携わるようになり、初代の責任者として活動することとなった。その後、毎年、1～2名の利用者が入り、現在（2008年5月現在）は7名が利用している。内1名については、清掃会社の仕事と兼務するかたちで作業に従事している。

表1 利用者の推移(2008年5月現在)

利用年度	利用者名	年齢	作業所利用にあたっての経緯	手帳判定
2002年	りょうじさん	23	食品製造会社(勤続2ヶ月)を解雇後に利用	B 2
2002年	まさひろさん	22	特別支援学校卒業後すぐに利用	B 1
2003年	せいりんさん	50	鉄鋼部品製造会社(勤続28年)を解雇後に利用	B 2
2004年	あきのりさん	22	清掃会社勤務と兼ねて利用	A 2
2005年	まさるさん	26	食品製造会社(勤続5年)を解雇後に利用	B 2
2006年	ゆうやさん	20	特別支援学校卒業後すぐに利用	A 1
2007年	ともひろさん	19	特別支援学校卒業後すぐに利用	A 2

### 3.5 支援者の継続的なサポート

作業所も、年々、利用者が増え、一人の指導者だけでは到底立ち行かない状況となってきた。設立当初からの保護者や特別支援学校教員の継続的な支援をはじめ、地元住民や企業、特別支援学校教員OBなどの人的、物的、精神的支援が徐々に増えていった。何よりも、農作業に関する地元住民のアドバイスやサポート、学校が全面的にバックアップできるような体制、企業の協力などが増えたことにより、作業所の活動範囲や内容も広がりをもつようになってきた。現在は、畑の他に、計6反程度の田も借用しており、年間を通じて、畑作業と米作りを行っている。また、地元企業の要請により、作業所のメンバーを季節労働工として一定期間雇ってもらっている。ここで得られる賃金は、利用者の仕事に対する大きな意識づけや労働意欲の向上につながっている。季節労働工として働いている期間は、主に、保護者や特別支援学校教員、高等部生徒が中心となって、その間の田畑の手入れや作付け作業などを行っている。

### 3.6 中間拠点としての役割

作業所は、特別支援学校在校生の現場実習はもとより、卒業生の中間拠点としての役割も担っている。企業を解雇された者やさまざまな理由により一定期間、会社から距離をおかなくてはならない状態の者たちを受け入れて、再教育、リフレッシュの場としての位置づけもなされている。また、再就職を目指す者たちの、短期間の活動場所として、ここで一定期間働きながら、再就職を果たしたケースもある。

### 3.7 保護者の関係調整

設立には、指導者とは別に代表者が必要となってくる。この作業所を立ち上げるきっかけになったりょうじさんの母親に代表者という立場に着いてもらい、正式な作業所としてスタートした。作業の段取りから会計までを引き受ける形で、日々の作業にも、息子と同じように参加していた。また、活動が広がったり、利用者が増えてくるにしたがい、その調整にも奔走し、作業所のスケジュール把握や保護者同士の横のつながり、関係調整などを行った。作業所の活動方法や運営などについて保護者同士や学校教員との軋轢や葛藤もあったが、常に前向きな姿勢を保ちながら、具体的な行動と時間をかけた対話でもって運営を維持している。

### 3.8 学校教員の存在

卒業生の進路先確保と会社で解雇やリストラにあった卒業生の第二の労働場所としてスタートした作業所であるが、学校教員の熱意と努力、そして保護者の強い願いと協力が設立の大きな原動力となった。高知大学教育学部附属特別支援学校40年あまりの歴史を振り返っても、この小規模作業所は、初めての保護者・学校連携の作業所であり、この作業所の設立をきっかけに、その後、保護者を中心とした小規模作業所が立ち上がっていくことになる。設立に至るまでには、学校教員側からの保護者の関係性調整や現実的課題の解決などに対するいらだちも多く見られた。学校教員にも、本職の仕事があるわけで、その仕事と連携、関連性を保ちながらの関係調整や問題解決は大変な労力も強いられていた。それでもなお、この活動を推し進めていこうとしてきた学校教員の力は、卒業生の生活や在校生の今後の動向などを見据えたものに支えられていたと言える。

### 3.9 小規模作業所設立過程の構造

まとめとして、小規模作業所の設立過程に関する構造モデルを提示した。設立の土台には、「この子たちを何とかしたい」という気持ちと「社会と関係性をもった中で活動させたい」という関係者のヒューマニズムや「毎日働きたい」「給料がもらいたい」という子どもたちの願いが存在している。また、「学校としての存在や面目を保つ」という気持ちの揺れ動きなども確認された。これらに加えて、長年、進路で関係している会社などからの鋭い指摘やプレッシャーとそれに対する学校関係者の意地のぶつかり合いややりとりも、お互い、前向きな方向でやりとりを継続してきたことが、作業所設立に向けての具体的な取り組みを促したといえる。その後、保護者や関係者の地道な支援の輪が少しずつ広がり、地域を巻き込んだ支援体制が整いつつある中で作業所の設立に至った。

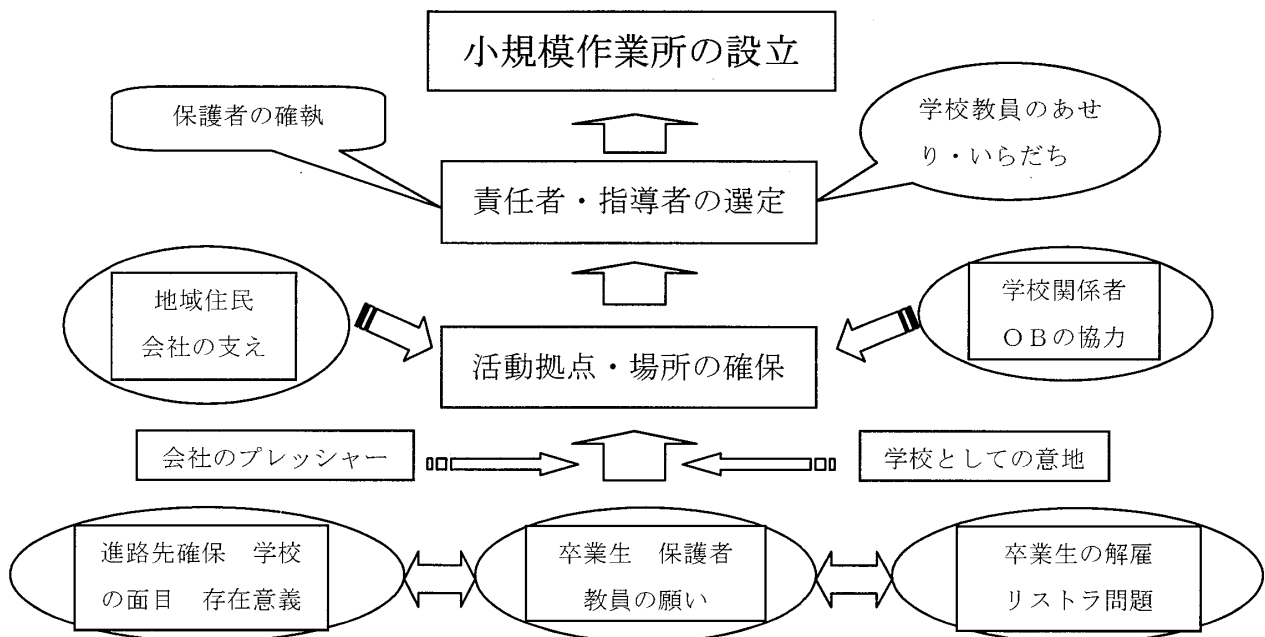


図1 小規模作業所設立過程の構造モデル



## 4 総合考察

小規模作業所の設立や運営を維持していくためには、支援者の根強い力と気持ち、行動力が求められる。行き場を失った卒業生にとって、「仲間と共に働く」という、私たちにとっては当たり前とされがちな活動に生きがいを見出し、生活の再スタートを切っていく姿は、支援者の継続的なサポートの原動力にもつながっている。地域の人々や関係企業などは、常に、学校や保護者、子どもたちの動きにも着目していることが明らかとなった。設立に至る過程では、「やれるわけではない」「何を素人集団がやっているのか」「すぐにやめてしまおうだろう」などの声もよく受けた。

それだけ、この設立に関わった者たちは、何も知らない、分からないところからスタートをしている。ただ、ひたすらに、子どもたちの生活や労働を求め、紆余曲折しながらも、前向きに活動している姿が、一人、また、一人と協賛者、協働者を呼び寄せることが証明されたとも考えられる。支援者同士でありながら、足の引っ張り合いをしたり、保護者間の関係性を調整することができずに、仲間を失っていくこともあった。利用者が増えてくるにしたがい、保護者間の調整もより必要となり、支援者の輪が広がるとともに、それらをうまくコーディネートしていくことも求められる。小規模作業所が本来持っていた利点やまともに課題も出てきているが、常に、作業所の設立と目的の原点に立ち返って、一つひとつの課題を紐解いていかななくてはならないだろう。最後に、これから新たな作業所や施設などを設立していこうと考えている支援者にとって、この小規模作業所「あさひのあたる家」の取り組みが一助となればと考える。

## 5 今後の課題

本研究では、小規模作業所の設立過程についての分析を試みた。当時のフィールドノートや学校教員の記録、指導者や利用者、支援者へのインタビューを通して、設立に至った背景と理念、活動の原動力について明らかにしてきた。今後も、継続的にフィールドワークを重ねながら、作業所の今後のあり方と維持、運営についての課題を明確にしていきたい。

## 謝 辞

本研究を行うにあたって、長期間、協働者として関わりながら、並行してフィールドワーク調査とインタビューなどを引き受けてくれている小規模作業所「あさひのあたる家」代表者田中誠氏、保護者代表下村静子さん、指導者の前田和也さん、そして利用者の皆さま方には深く感謝するとともに、地域住民の方々やバックアップして下さっている企業、これまで一緒に作業所設立・運営に従事している教員仲間の根強い支援と実行力、ヒューマンイズムに敬意の念を表します。

## 参 考 文 献

安部省吾 (2003). 「知的障害者雇用の現場から一心休まらない日々の記録一」, 文芸社.

- 石山貴章 (2008). 福祉機関の役割とその活用, 大沼直樹・吉利宗久【共編著】「特別支援教育の基礎と動向—新しい障害児教育のかたち」一, 第25章, p. 243-252, 培風館.
- 上岡一世 (2004). 「自閉症の子どもが地域で自立する生活づくり—地域の中で生きて働く力の育成—」, 明治図書.
- 宇川浩之・矢野川祥典・石山貴章・田中誠 (2005). 「離職者への支援と連携を求めて—小規模作業所の意義と実際—」, 第13回職業リハビリテーション研究発表会論文集, p. 258.
- 宇川浩之・柳本佳寿枝・矢野川祥典・土居真一郎・前田和也・田中誠・石山貴章 (2007). 農業福祉に関する一研究—小規模作業所の維持と継続—, 高知大学教育実践研究, 第21号, p. 25-31.
- 小倉昌男 (2003). 「福祉を変える経営—障害者の月給一万円からの脱出—」, 日経BP社.
- 杉山登志郎・高橋 脩 (1994). 就労に挫折した自閉症青年の臨床的検討, 発達障害研究, 第16巻, 第3号, p. 198-207.
- 武田幸治・手塚直樹 (1991). 「知的障害者の就労と社会参加」, 光生館.
- 中根成寿 (2006). 「知的障害者家族の臨床社会学—社会と家族でケアを分有するために—」, 明石書店.
- 西村章次 (1986). 障害者の労働と発達、教育—その実践分析的視点—, 障害者問題研究, 第45号, p. 25-46.
- 二宮厚美 (2005). 「発達保障と教育・福祉労働—コミュニケーション労働の視点から—」, 全障研出版部.
- ヒューマンサービス研究会【編】・富安芳和【監修】(1994). 「援護就労の挑戦—The Challenge of Supported Employment—」, 学苑社.
- 秦 安雄 (2003). 労働保障権と発達保障論, 障害者問題研究, 第31巻, 第2号, p. 117-126.
- 箕輪優子 (2005). 「チャレンジするところ—知的発達に障害のある社員が活躍する現場から—」, 家の光協会.
- 宮内 洋 (2005). 「体験と経験のフィールドワーク」, 北大路書房.
- 無藤 隆 (2007). 「現場と学問のふれあうところ—教育実践の現場から立ち上がる心理学—」, 新曜社.
- 村社 卓 (2005). 「ソーシャルワーク実践の相互変容関係過程の研究—知的障害者の就労支援における交互作用分析—」, 川島書店.
- やまだようこ (2007). 「質的心理学の方法—語りをきく—」, 新曜社.
- R・Emerson, R・Fretz, and, L・Shaw (1995). Writing Ethnographic Fieldnotes. Chicago: University of Chicago Press. (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳, 1998. 「方法としてのフィールドノート—現地取材から物語作成まで—」, 新曜社.)